国立公文書館
National Archives of Japan

林學拾葉 六

内閣文庫

番號	和 18282
冊數	35 (29)
函號	263 33

内閣文庫

冊數	三九
架函	一二
號類	二八三三
	和書門

内閣文庫

冊數	三九
架函	一二
號類	二八三三
	和書

挟素拾葉集卷第二十六

目録

永福門院合歌　藤原資定
同　同
嵯峨いせの殿和歌序　後原実枝
桂林集序　同
百首和歌序　同
四季詠藻序　同
清見氏記　同
祈石院右府七年賀記　後原植通

内閣文庫
浅草文庫

長源院殿御法華経　　同
法華経記　　同
雅春卿法華経　　釋道澄
昌叱とゝ為分和歌序　　同
実源院贈左府遠忌三年百首和歌序
釋義俊
号朝法親王
源義孝
九州記
同
関白抄版　　同

美想記　　同

扶桑拾葉集巻第二十六

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

永祿訴合論

藤原資定

此一巻ハ人々ノ訴ヘ出タル事ヲ
雖沒濃州ヨリ為ル色義ノ為ノ
乃チ為ル不ル義ノ者ハ先ヲ
事ノ由ヲ以テ沒濃ヲ
ヒ田ヲ以テ沒濃ヲ
て作ラレタル田津海ヲ
りみぬまいかるたにみをつくす事もスト

い跡のこれてそこなうとて国侍と
きそこんらはまたあれ田れ人とそこ色
をそこうあをたてまつへこ事をうねこ
うしいをそうくいるあんこそいはけ力
いそうらはれるつとそこしつをはうす
なれ夏姿もおそうしかくの人はれ
もそんもそひしくて汗衫さそまうな
こそこそて侍き

書をいさ発和歌序　国

すぐめ明う月内をめれそうあ細君

世をそやそこうあうはこ名あうはれ家
神よはうせをあうあ杉ひの事ゆうもの
よみうくをそこ玉はれ家うはかしわうは
物はうきこいかれ人をうるいなれ郎
祝をそ和をのうの月こ我杉ひあおをわう
国道ようはうきこ命をうこうれるいを也
はなうひはるを世内なあるをそ慈慕
の形ををんあこなるを今はうはあて
ようて杉こうるはうの内妹内日をそ
はをるくをそこいはうふれすこし
なる物はうをを玉はうの家られ書はうひよ

ゆるしたまふ神の社にまうでたまひ
ぬるとき、あの世の世間のちくさあまたなる
て、神宮の上にくもりなくてはるかに
所の事なり。神の家をいはひきよめ
さかりなるに、ものいはぬ草木
匡房卿を添へ給ひ、右府源の大臣
うしとさとられぬ。野川の
や世中をなりひらの中将、恋歌
おくられめんかをめ、業平は海をくだりてき
し人首代見物を、藤塩草に書付て
魂の除歌をとりぬ。いふかりの

行すゑといふに、その外の人々の家の
ちからはすくなく、身とは成さん
世をきふかとこそ、ふるまひぬと
こゝろかなしひ、世間のありさま
見て、嫁の三人ありけるとぞ、
あさ人とふかる者の、一巻
ものまに
ものこゝろすくれたりけるもの

徒林集序

藤原實枝

屋内をうしなひ、世代をもをしとたさむるを

とりさかりてくさぐさの書をかかる草
木と絹の種とりいくさの道とりてくさぐさ書り
かく鳥獸をんの名とりとりてつさすといふす
ねし今の世の中はしりてはりて葦原の月
をれしゆゑとあるあ給の事なれ
あるとおらてくしかるをとを
かるべき御代とありけるいはしてと
ちしとあ関めをいは州道の所をよりをとを
をひかをへきをとをとをあるをしをを
朝に征東細柳菅原の御下の源直
功をりを遂てかりぬりとをしをりをと冷

しかりを嘯くをりを月菴と稱をとをくい
遁船を行をとをの孫ちをくい西行を風をを
今古をを色ををまるをとをくをををを
一数をりをををより毒をを
中を義ををを食を求をひをりをを玉を探て家
れ一集をれをし細を細をりを玉をををは
細をきいををのひをを中代をりを
ををれをををを
をを夢をををを満を珠ををを
をりて後をを三百卿貴を拾を学をを
玄の玄ををを夢を得を事に新を

数れば行くすゑもとをきてとゝまれいまは
はるかに年をへにけりうゑしゝ人のかげ
数百そ世中に嶋ひとつ暇なきはむとみ
きわくゝ類とわかるゝ先ゝ一ゝと
行くゝ久しき月をうゝくゝ桂林集
といふものをれい一枝の折のこゝろを
とりて此花にもきうゝみのゆゝなれし
みてゝと問ふに天の通りてこゝろ
とゝまりぬ

百首和歌序　同

天下太平の時にあたり世中
に出とたさ失ふらんとてすゑを孫にみとと
らせ給しそ光明皇后の御母
小野の宮とゝ給ふ神代のかたちそ
の御ゝとをもゝ紙にかきたまと
をはしまれしやはらの人の代にあたて
東征のゝとをはしまさなりぬ
ゝ御の位四十餘年八月を御ゝかれ
ゝ失ぬしゝ世の中人はんく
さそくかうきたりまを中ゝ
はをしやとゝて乗ゝ人磨ゝかとあ

世をすてて山にこもるまでは
うハ家こころをもとめ
菩とはなを乳樂のもとをしく
あてをもとめ人をもとめ
れなをさらぬ人もまれなり今ハ
くらとなくくろよりくらはなれと名て
なさなん世とをもとめ家をとゝ
りまとてをもとゝ長れをもいつはなを
ゆ秋の物もむかくくちすを秋ハて
ハをとゝ秋ちよ仏をもをもとくいはくのを
ようんれをねしゆをとゝ葉れ来をを

へをしをんせをとゝををゆ修理大夫義
貞とををををハ松浦ハ神ハををと元弘先
くを立ハ陸ををををををををををを
世をををををををををををををを
ををををををををををををををを
ハをををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを

しみゆくこと家の内にありやとぶらふつめて
うちやみなくくうせいることをなんの色も
立田姫をなぐさめやあしまをよせれ
るうの天才とえうちんとくよりを今の
世にうくしまよ神ふくあやしにまてよ
と見物がくろいに作うまくこのうさくのう
ちまれまんくれるんにかさくいうくれど
くとうやすらいるうくまれこしはみれ
よ今はひうを奥は系すりやをうんて
ううてわをふしにうて拙点くうやはか
ぶしまれひおのをめかくてるれ物よ

感ずるんのそんさをなるよや嬰児のとうとく
寿そんやうに祝ってもりれくあうさ根さて
の百さまおうへはまさにうく老のうち家
花とをうておムてり毛とるをうい清
やうてもはまうくくるん

心珠詠藻序

同

ちふ百花寶と打ちまを京の百さ国を
捨て仏の道ありい教人ちを天のいかんう
ぬうてゆから往とあうりて世ちさうを
ありまん来の濁りをかうう先をうい行う

此時禅人に志願の為に法
くを清涼野の寺の僧をおさめ侍る
世俗絶しうこと也此の法を
雲水のあとを尋ぬる人
此の法を人の
と異し法の法
を也く法
なり此業に
是の法に世
ぬこと也
とのはら仏祖の正見を

めぐりて、勝る羅としらるれば、一中納言
さうあつて、ちりうく心殊諫藻と名付けを
さすれあるべし

清見の記　同

清見は勝景にあめりさの寺絵すり、馬をさら
しむるかたくはくと委し、揮と敷もて
をけく、揮とわをを、後ちゆくらのい、十歩ま
あるべしひ目とつゆとよ八湘と捲く一望
の中よおもむふあるし、まれ乱を避て来り
赴く日、屋とは梵図は投きて、扁舟とりて

ゆくよう清のしりく西絵一幸をけていさて
早懐をけおもし、徐凝の西詩のあさもりよ
効と志うよ

清見うさわさゆふなれくらふしを
りみちもしもあれ文れ
約やうく風をらよ人れを絵ちり
きりんとをは乃かりやとり汲
兵馬飛塵満九衢　百華春過未曽斜
莫言勝境無常主　萬里江山入戦図

稱名院右府七十賀記　藤原植通

おもし入道前右大臣七十の算を賀せし
めむかしの七十首の和歌をすゝめて彼亭
にして歌人を催さしを讃頌せしめ給ひ
に萬歳を祝して一盃を勧め漸酒酣にし
て権中納言為益卿ところより十首の詠
歌をとり出して遊宴の席に読ひ申しに
大僚三品の長生はそめしをひきいくれ
へきらの当爵たる人はいれいしを感情ゆ
就しや入道前右相府答和歌ありしや柳
式息りは東望日にかへりて一續ま
短冊御覧をきこしめして七十首のうち浦尾

の愚詠を浜松かえにかきつけさせ給ふ御製
すふそえる松のしもの数もしるしと
いく十かへりの龍にほかなし
となんかく叡慮のあさゆけなかさし入道の
ことのはをいひそへ時にあひてめいほく
はいてりおりなきことくそや
君か代に龍も七とせ十かへりは
めくみの名や松は見んとめん
とすけふに入道前右府も
よろこひのあまりにかへて老鶴の
はるゝし居る雲井なるとよむ

亦乃日和ふれとちんけあふぬ古とも。
はすの乃時すあつれとをんこしい南禅天
龍相国乃言葉すとと詩て和漢と法行
きめ作りうれしきを一巻よ志ぬとくよ。
歳源とうそのきいい遺院前内府八十賀
算乃八十首ぬ短入乃裏書天文三年四月
廿又日也三ものをおるをよあきり。
志きを八十賀とくあきを瑞相うのあ
あをををのなをし時よ弘治二年卯
月廿又日いさをを志きを作り
長源院をいきめぬをを

同

かの世を老の不幸世変ぬしいなきはおの
とをうをもなぬとなきをもわをうを
をしかを長源院ぬをいやみくを日数とをく
為御ものをれをうの事をいををひま
をを作きをもをんぬ御みををしてをし
ををを愛ををををををををををを
をををいをつぬ事をを法をを法ん作ん
きををををを御果ををやみ作をなををを真
紗述ぬををの作ををををををを感
をを小遠源をを孝小扶ひてを顛帝をを

孝にはひてをりまとみたいと文にかくすれども
我みな筆とんふにはかりみなをりて常に恭
敬貞信にしてむしひ行てこの世に用ゐる所
かきまて笑えけるに藐姑射の
やうに見てうひめうにはかりに適昭の事ふ
とうとて
もろこしの家にみえてきえうとう
ものしりにはかりにはかりさ
と御ものがたり惠日山の法光見悼愚愁和
詩あり中頃に老若ともふ生死はかり
きにかりこの御もと眼前に脱とみる事と

彼昭女の一引ものとて廳辰士のもとやう
きもとて紙字に遅速をありうるを見地の自
ハ為しかむやいはを九日ふ菊に年よりんて
女年と後にはかりにはきもとて六日に
とてはかりふきもとて家けき弟共いりすり
きてはかりふかりとにはかりとにはかり
かりにはかりにはかりにはかりにはかり
十三年に月の紙に紙に用ゐ
にすひはきて
六ひより月の行未もかりてり
秋なれるうちなんて

かくて日ごろもうけたまはりしことどもの
御こころにかなへたまへるいとうれしく
ことに、あはれなりしことどもの
てゆくゑ夢ばかりなりけるこそ
こゝの年ごろふかき心ばせをえそなは
まうけとなりぬるものを
しあるうちにもとのうへにてこそ
かくてはかなき御ことと綴りたまふ
水の泡にうつりてはかなき身とはいひ
ながらえぬこゝろばせをあらはしたまへる
ちぢにうちそへてかなしうあはれなるを

かくてつけてもうつくしう
ことばにはいとうるはしくはかなき
ゆゑあるものとおもふ男
きたりの袖にとそれとなく
老のなみだをふるひ
庭にはかなくしたる
まうしもあるものをみゆるやう
なりたまへるいとかなしう
なれたまへるとい
世の中は人のなげき
なるべきことなりけるを

と書一紙なる松とあり小文みえあ
人りうそうれ
ろいとしたこ
新しかのみ
たあらひ
いうらなさ
まみとあふ
もてゆき
は花さうひ
神はそ
久しふ

かはのしたしふそあれけう
かけうれまり
やてみそ行来ちを
りつもり雁とまん野ふ
そけとも花のするをして
きれふやかとふそきれ
ふりそてとそとよ
あうそ河ちかそのいれ
人なめう松ひりむ
きぶそひふ人れうけをも
わちりるまをいれす

みてをまつ山のむそみちんの
やまのもゝすもれあるゝめくとと
かゝ家ゝしゝとゝふとゝとをとゝ
とゝんみゝんんみんかゝまゝしゝか
をとゝくゝゝ百ゝんゝゝくゝゝきん
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
か新ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
煙もみゝゝゝ雪ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

れまくとわつらひてこゝろゆく月の
んをうしもをんなもをうをうへ
ゝとこれ二代の日うとわふうて
こゝ嫌くむまそうまうくうわし
天正とゝのあまり二十七世代秋から月の
はうまつくゝ夢のあまりて筆よゆうする
ものがたり

源濃記

世よりかゝ箱あり言り天正元年
ちうしの中の十日ばかりやうれ立あり

ゝ代その四方をみまうゝ作りてはくし
あまよりまるゝ思ふんいまるとれく
れしほうそあり松のむしうすて
ぬりあまてゝ宮ハ棟はけうふけう
きるあてさてゝ小野社壇ゝ思い心
はるゝくゝ雪ばかゝれハ寒天の雪も
をゝ紀ゝ松風のそえくゝしてゝ
うふ神さのくゝ作ゝ作ゝ
作ゝ
吹ゝ石ひまきゝゝ九ゝ
和世のゝ松ゝ夢のゝ

高野の山に雷雨すさまじく降りて、袖の上をも洗ひ
てしぼるばかりなり。あの山をうさ言につぶやきみ
ちをみれば、苔むして、柏ばかりぞ残れる。薄の穂お
しなべて見わたせば、光源氏の御ありさまの、
思ひ出でられ給ふ。つくづくと物思ひ出でられ給ふ。
そこらいくさ人とゆかしく、合ひ
たるものどもの、ものとりゆゆしく
ものものしく、武士の世と思ひ取りて
うれしがりなりもさまの山
ばかりしかるべきの古今
廣沢の池ばかりとりて、愛宕とり

の上にて、水島の船をも見出だしたり。
高野の山の麓にて、
うらうらの山をさとりて、
なほ、くらやみの池
の水、清涼寺にまうで
給ひて、所々をもうこと
なりて、仏にまうでおはしまし
ぬ。
法華経を仏に奉り
供養せられたる。西堂受戒の義よ入給ひ

志あり行人ハ行ふ所の法華経ハ
一行ふ所あるべきなり傳教大師の造る
所の歌喜天忽然として人ハ来りて
ものを霊験日々にあらはれ
示し給ふ三宗入道前右相府帰依の
と領ケ所いく禄定殿下ハ
ものを文倡作の堂と命じ給ひ一字を記
立ちなり相談まして相
うれ百と語給ふ亀山の
給ふ所ハ別国開あ
一幸ものを一所を

しと西堂ハ他行なり才子の受祥論師の
人さし濱ものを給ふ
極色なる寒ものし事と
ものふ所一山沈り雪くりて
しと亀山と
願文をものを
問民乃ものと
ものを毎ものを
形ものを雷
快楽二法長久
乃濱ものハ一

願主天平勝宝一日乃中より刻彫して仏法
大師乃住吉しるまりく帰命をしめ行ふ也
長者容と埋てくうけてくて堂と起立し行く
西寶と願てくて堂海乃第してうらいの参
てかうまりくを堂と世りい金を行をは山寶を
成就乃元兆うぬこいまと世本と移り金を
願しくて山乃名ばくはくて古今集かう記の
歌てくぬうけてくて

為乃名乃屋のこうたしてくて玉乃
ちはやあてくて代はたをも
宮乃月八野猪はと命てくて光りはみ

かうまりくて大井川はたりくて遠てくて見
やてくて明石乃海をくてくて行はた
彼物乃てくて

大和河なる乃とやかてくむ
あてくて乃てくて乃とくて乃
禁てくて二寺教化乃塔婆乃阿弥陀仏
迦と長寿て行乃くて山家寺まして鹿く堂
こけてくて久しくて零落せてくて法然上人
中興て住持定敬て家敬て行いくてくて
てやひとてくて御てくて相續おりぬて
御てくて乃家寺乃縁起と伝見をて

其ゝ[illegible]普光院の御臺湯春院
と青蓮寺流円相府の息女とをけめ給し
給ふ[illegible]と運い給いくばく
こ系敵乃一類当家[illegible]恩仁を中
乃会釈し殿堂を感じ[illegible]廣嶋
和尚の草屋乃新と結い給ふ道遥院へ
乃前円相府の意志と励し給ふ事百千
勝計[illegible]と[illegible]せ給ふ事
事一応遠流[illegible]
と[illegible]流御[illegible]乃はんとにて
給りく仏敵方史房舎り[illegible]

しく[illegible]度乃諸乱し清[illegible]
破部しく[illegible]
[illegible]
いく[illegible]
四郎宗[illegible]
世[illegible]
[illegible]
て[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

しめ、是ゝ閑叟乃灯明ゝ有ゝ、宮殿
とゝ有ゝ、七十有餘、古来稀ゝ有ゝ大臣ゝ
廿四日ゝ先師廣明和尚、高ゝ、藤岡ゝ
紙岡ゝ、ゝ、ゝ、相親ゝ十三、三軍親乃
論義ゝ、竊ゝ相親ゝ、中、濃ゝ、ゝ、
色ゝ、ゝ、安楽行品ゝ、親一切法空如実相
と説法ゝ、ゝ、二ゝ、二ゝ、軍
意一ゝ、ゝ、ゝ、禅話ゝ、相言故、同ゝ
別ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
おゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

小金乃山、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
西行法師、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

[illegible]

[illegible]

年をくりかへし元日より一七ヶ日歌長天上百敷
とわすれもせずかの時天上百敷とる
らさに心をのこしてくれたる御ゆの下
紅うすくもみぢせしかとおもひくらべ
と毎月毎日拝し暁ごとに清涼寺の
塔のもとにきこえくきこえくし忉利
天上の春はいやしきいやしき梅檀の香
宮乃中にもかほりけりけり

さうの寺塔の[illegible]久さ乃
[illegible]きの者[illegible]
試毫
[illegible]
年とくりくまやまうん
清水寺本新前
[illegible]
[illegible]
二月紙已清水と二尊般若[illegible]
[illegible]
[illegible]

まつ孫くわんとゆりたぬく山に
魚さてみ香乃まくいうらかん
かくて重とよりく發句とともむ乃後まで
山乃名をつきけり

亀の外れ山やいて千代守やみ香
これあへ次せしかハ
長覚

そらをむかちこすみかくむ神
紹巴
当代のえとより乃れ?ほうそて
かりぬめかうしをといひたちて天神ありり

手向仰かりし御上へく二尊院の佛おき
まつりて二世安楽乃きと念して後さ逍遥
院乃肖像をむかひく家のわたを御く

ことみ家乃露ゆめのみを仰ぎつし
おのうかえさ乃もとも微とる
称名院入道前右相府乃弥前にて中牟仰し
を拝かしゆうんとかしと家別会葬あり
付くこうくかへつりうりとくて逍遥院しつら
人々何をみさりといひるうろも行住座臥に
弔をとみ海乃仰きて

これこそ月ゆきうへく志の深り

ふさぬるまくらもさしまくらのみち
二月はとたちくる
あるあるものとしいつきみかはの
出こしはてはかりをきはけを
四日雪のかりくもはるのあやめ
はてのぬきのてを
春やまくしやゆきをもちゆえを
とくあるとまいむのかの
雪のかりくはけ殿山はの日の新たにおもう
澤つくりてくらくらはりとけは
ひくひしとさまてをかりてのさ

かりつくる雪のうつかさそれをと
ゆきのかはしはけ嶽のかれ
六日節分よ
あかはけ春とむくはいゆくまれ
むのたしやゆそりるん
六日立春
はとゆきつほのむたいつまくら
見てとはもちはまさうち
今日いゆのゆはたはのむうとうをを
ゆくゆ宮殿とをはうくはさしはくて
ゆのゆ雪よのゆ春やをまうはくんを

乃ち[illegible]やうに[illegible]ものを[illegible]梅をかこ
ろいくさまのいけるうつ[illegible]

自是花中巣許輩人間富貴不關渠

けんを巣父許由とくらべ[illegible]乃[illegible]士[illegible]
富貴うんとうるはしく梅の花中よりとく
ぬきんでて感しく作りたる詩と今とを
うるはしく乃ちうつくしき歌詞
とをかくふと云今

窻前東嶺到青陽山下鐘聲送景光
我觀世間巣許輩一枝花亦是孤芳

こゝ乃ちとをこうらとを名ける梅

[illegible]より春の[illegible]
無の秋をのれたるとしに[illegible]
[illegible]あしけるこのもとに[illegible]
らく[illegible]りけるひしなくさうのう
[illegible]と年しもれ[illegible]
乃ちとしけるとをいんてしのく
[illegible]ひしうりあつと
[illegible]ひをけ今も梅のとと[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]
七月後京極殿の殿乃御[illegible]
[illegible]

いみしく人のなけゝとて橘のこれ
よしの露に出かりしかはさえん
八月の雨しきりにふる廿七日なりけるに
並の居の松をみて

亀山のすゑのうへの居ぬ行に世ハ
千世のゆくすゑ遠きとつらなれ

住吉法親王の行かたとかくし塔おかしく、今の
満れの世にはみえすなれりし、君はしみなからも
うらしけ年経たとてしめくたうしも御る
て、仁和寺の北の御所に御さうて、前よりの御様して
御らとせしめくられにかく顔もまたて財産あり

まや、南山のあはれなとさとし給ひに清水寺をまとをはし
給ふまて近辺の人々まし遊ひ給ひほとに
かくいりかけ給ふ世のなさけのあ

とふ下ハ都へのみちにかかり

十月の末月もさらにかゝる雪の白さなとを見て
あまさの月はかの人にまかせ
ふりはてしの雪とともにそ

むさしのはほのかのつゆの花咲く
ちりもみちもり雪と見えて錦

十二月をたちの杉のしら、近きへて以下やよう給ひ
して給ふ事は

[illegible]ふうれいのあん世をよそ
[illegible]
廿二日後夕相模[illegible]
[illegible]
[illegible]
廿四日[illegible]
[illegible]
[illegible]
廿六日天神[illegible]
[illegible]
[illegible]

法師二人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
廿七日[illegible]
[illegible]

紅白梅花　招請諸老二月廿四日

招得高賓興最奇　爲梅幾度要題詩
聽鶯莫作杜鵑去　紅白花開春一枝

洛陽見花　於水明院光明和尚興行　廿八首アリ　天正二沽洗十一

暮捲珠簾見白櫻　詩翁修得舊時盟
洛陽司馬約花杏　吹有清香慰老成

右須臾孤雲中日輝　孤雲去日輝

花をみるにつけても人はかなしきものなれば
さらぬわかれとこそ思へ世の中に
色も

寶泥

まれにくる人をも折ふしてなれ
ぬるかとぬしはしるらん

出家して後ほどなくこの世の中に侍りける
さらぬわかれとはかねてもかくさ
ぞのことなれどもとかくいとはれ
ぬるかとぬしはしるらん

月をみるにつけていとはれ
さらぬわかれもあるものを

東福寺前の流に後成恩寺殿の建立して侍りける
さらぬわかれとはかねてもかくさ
ぞのことなれどもとかくいとはれ
ぬるかとぬしはしるらん

住吉の宮に月輪殿御女の
[illegible]

[illegible]

三条大納言家の
前夏
[illegible]
[illegible]

蓮

[illegible]
池のもちひの[illegible]乃[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

遠忌

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

於二条殿下亭竹契遐年と題して南
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

九月晦

[illegible]
[illegible]
[illegible]

雅喬とい[illegible]

釋道澄

前大納言雅春卿（今昭義院法名了雅）に、ものし給ひし頃、
仲
のこの日うたあるべしとて、ものしたまひしに、
なほ、雅春朝臣、六字名号
をとりあつめ給ひしに、遍照の保吟あり。
うりを切りて人に
たまはせんとあるに、
平の○ひらくに到
こしらへ、法性寺の
ことをもつて、平
如無所とあるべし。
仏法貴相といへ
侍りて、奥の一首
いとうかの作のこ
ものとあるべし。

ふらし
白雪の降るを年ぞうつるとも
消しあのの作くやいあるな
世中いかにたにて蓮とみ
さひらうつるをうるをもい
かよあるあるや人のすむらん
心地身なるまつ仏
常の事とそをもつ仏
花をそ梅うえ
しをんもん梅の
あるものをあつ

つ月前ゟ病おもしかり給ひにてかゐく
世とゝもにつきさせつゝきものかし
さ
さらにさりとも歌よみてとゞまらし
ゆくゑはいかにしらましやとのきゝ
う
うつゝ白ひのなきしふなきめ歌よし大よ
いふ事ぬることもなけれは法の札
昌叱とゝもにまめ親和歌序
同
昌叱法橋ハこゝし耳ふたふ年なりて又
ことし卯月も又病おもくいみしうその甍
紹巴法眼もとをれしもとハぬ事ことなる日数
けふふし給ふさまへいのちもなりけふ
病の床に臥まし法橋らしくハ様々としもやるそ
みなきゝしり祖なりし家祇宗長をたてしも
たちまちのなりさやうなみなし紹宗牧法師
連哥は好むも我の子にもとふをいひてしていひ
又宗長もきと続きして斎まゐとといふとして我の
身四十よりてなみとみゐて世を辞きしみ
昌休法師よりをいひてまゐりは親のみと
浮かうちに人々にしいゝあやし今昌叱も
あつ宗養もなけれは伝すらいをあらり
し紹巴と同様にして我の牧も

のりは仏ちかき法にて人をも
やはらげ、善をすすめて世のうへ乃あとき
えあるをかけうみいのせてうばんさす
世と知しけるやはらかれ書あそれ
しいさうを持て、ちまして、はなはだ
第ふ、ちの行乃
あはれ不世きこえはは世書世
さ知ぬ月にてかりちをはは
秋乃春かなるめるて行事ふ
入あるる月も行くやはあれ
光源院殿右府追善三十一字和歌序

釋義後

さ河は三好松永とゝのくせをむくつすよ
ゆゝ行り、いみ卯月乃をゝつゝ大和の内
ちり乃りつゝ細川右京大夫とゝ
道代は主殿若乃あるゝて行ゝとゝむ武
ゝてもちゝのゝ及ゝ乃ゝ人ゝ同ゝ
あゝ、征夷大将軍ゝ社御級をゝ乃
半ゝ成の乃行ゝ、みゝばとかくゝや
つ屋ゝゝ、屋は行れ月乃十九日辰の刻
ちりゝ、何は部ゝもゝ御ゝ人は内一
押入ゝ、ゝ行ゝ乃麻苑寺殿一年田和象

守護ドノのと御むかへにまゐらせ給ふ北山より
出京の道にて討たれ給ふ也
件の人幸乃殿十三位乃小童
乃ちなれかたちにて彼幸四と討たりし
ちなれ世さい稚一日
うけたまはり殿中おなじ一所一乳も入ぬ
母公慶寿院殿も行方をしらず
沈殿と北方はさめたり
四位ノ殿ノ出家
十文字さきの内
く殿国とをく一人も入ぬ

沼田と也所と福田所といふ者あり歌のお
ちなれとをんなめ竹の葉とをりてをく
はをとりの国へ入日来ふる所にるを
御自所わりけるいかゝ乃時代に用うや
彩りとをしめ先ゝ家にて軍いをとちら
をとし具足いさまを新きれ人を御さきに
夏草乃友なをりふみをく新をく
うち出さ志ちをれ御馬をとし
河原ノ家ノ家ノ家ノ家ノ家ノ家ノ家ノ家ノ家ノ家
をつまと涙と涙と涙と涙と涙と涙と涙と涙
めドをしてをあ物つゝいうをと行

あつとゝめくゝ討死をとゝ
を給ふ事なりしとゝ
ゝ事をとゝ給ふ
御服とめされ給ふ

山月毎を落ふ風ふきぶ

とゝ為とゝ御家よりとゝ乃人ゝ
也御月筆にて御ふ給ふとゝ給ふ
人ゝ給ひとゝ也しとゝ日ゝ秋乃也
ゝ給ふ七日ゝ給ふ乃ひ給ふ
かゝて安沢山清浄光寺他阿上人より
てゝ給ふゝ法事と給ふ御さ給ふ字名

号一遍法十界依正一遍能一日行離念一遍
作人中上ゝ妙蓮花乃七言四句ゝ文の頭
字とゝ給ふゝ六十万人変定往生と一遍
上人のゝめ給ふとゝ給ふの給へ給ふ乃
御歌を歌一首乃ゝ給ふゝ給ふ
と述ゝ給ふゝ給ふ上人ゝ給ふ給ふを
ゝ

さ
さ家いちにめとゝゝ給ふ
乃給ふ給ふ給ふゝ給ふ
み
みたゝとゝ給ふゝ給ふ
給ふゝ給ふ乃給ふ

た すえたりし春きてけりとてうくゐ
人おもふのさかとしそしれ
き 御身にありしいつて世中と
さとりて見ありくこ歌きつらぶ
と 別る所の孫ひれ米も忘て向ふ
やよたよしへの道とおもてえ
つ 法の玉代露後のこゝろふ絶まふるよ
おもおしかふと思ふついに一へ
ゆ 極ゐりまよ世そそありぬ秋有をよ
門りいふるとききあれ小車
つ かこきりにけれ庭としも恋をと別きあし

ふの宿ときゝて見ゐはしゐるは
か なめ宿るれうよ世中とうしいくく
ゐやとくしすむ所ありけれ
と 家古さ人これ庭へとなりゆ宿え
庭よう草のりうやあるゝ秋
た きゝうち孫ねぬやの歌にいくつろの
ありてとおもい忘めつる露
つ かたほりの行つきを秋て極やとく
おもやしおもるとみありけん
か ほしやるは袖としそ露ゆ夕くいい
程ときおもう秋嬉のしう露

こうしたりひこしーんうと
まれまれ今の世のためれ
どやくゆきくとなれんとそるんりや
きてしーこは乃ちれゆんん
き昨日しそ宮あるんびひ嘉
夕をあとも乃ちれのてへ
を見ゆされ爰とも絵あとゆよりと
うてもさうふらけうれと
と和ら乃浦とんとせく波風乃
さりさをけあれ絵を波れ
うかさ記せうる記乃そくと

仏ふとを絵ゆしたうん
お流れよい石とをとたる波とあと
ゆくくむをふあれ事乃
と嘉ゆうさ彩ゆを絵ゆくく
れ乃りいあけあきり乃世や
あ暁乃をかれをれ用さ屋
ふしくんとをくゆうん
け宮とたを品ひあとをくく世と
ゆりゆん人とあをさ絵ゆれ
ようまはくを早て絵りあうふ
ゆるこをいひしをくとをゆうひく

くりかへしこそ仏をむかへたてまつるなるべしとのたまはせたるこそ一宗の行ひ
の極なるべきさまなれ
なほ世をいとはしく思ひ入れたる様なるこそ
うらやましけれ
かくりてこそ世をもすてまほしけれ
思ひ給へ入れてもかくなりぬる
世の中はかなしかりけり

武蔵の国保土ヶ谷寺にまうでたりしかば
くりかへしてつくりたりける
ふるさとわすれがたくとぞ
かりの世の松はかなし記

當朝法然上人

叡山のことは世をのがれあまたのゝ退出はよのいとまなく仏門はかりなく
精舎伝国はかりなく慶乃ものゝ時つゝ
乃道をとゝのへ
をこたりなくして
命をたもつ山門無乃中なりく
西京北京くよりまゝ

同者乃祭礼も昔好とする乃
やうに成とする乃ハ神事も
例ありなれ松のほりて神楽の御
拍とうとう伝乃ものとうとう管絃乃
めでたさ家ハ家根ハ家根ハ
ものとうん伝乃ものとハ松乃ものや乃大阪
ものとうん伝乃ものを伝ものを伝御幸
乃神感もとと級乃ものやうに世ふしいあ
つ乃ものよ新古後伝乃ものを乗頼ものと文武世ふ
をくれ乃ものを乃ものとの伝乃ものを伝乃ものを
ものとうや大津乃御城郭とあつ家伝乃

神乃ものを表乃ものを乃ものふ松菴 東玉 雑奇 直芳
ものとうものとおのものみ伝乃ものを乃ものと
おのものを乃ものを伝松乃ものを乃ものを
乃ものを雑奇ものを雑奇ものを雑奇ものを
乃ものを風情あるものを松乃ものを乃ものを
ものとうものとものとうものとうものとうものを
めでたさ婚ゆゑいとものを乃ものを家ものを
家乃ものを伝乃ものを乃人乃ものを乃ものを
乃ものを乃ものを乃ものを乃ものを乃ものを
ものを乃ものを乃ものを乃ものを乃ものを
中乃ものを

とのつくる千年もぬへしくる橋の
松のむくろとみちのなりけは
こゝの日。ほろく松をやうやく生れつゝて。
昔あるは橋も今つくしほのみとりそ。ち
とせの根さしいちこちに半。神恩有かたく
覚え給ひ。文武人々松の苔地とたゝほしき
こつとあるのこと大津京天智天皇御宇あるの御門と
ゐやりみとしいきとりく。大津ふ都を築き
まうけして。今の三井寺と彼池門の勅願
所としく。滋賀の都ふすり給。三會の暁まてたふ
おしき御堂物揚なり。ある時天皇かり

崎まて行幸ありし後ちふ。沖中より淡海二
神さへのしく来れ。御門見と追つ有く。
これのよしを叡覧ありて。二人の蘇ふり
二人の名あり神秘ゆへ不載
御門へ詔ろかくして。社殿を奇
特ありくかくらるまて
大伴の何はか浜へとうちさらし
とせく何浪のかけ来ては
よく舟ハうちよせ来んそ見て浜則神詔
まて山王の御神とせうり。日吉霜ありくて
とせうりあまねり。今と祭礼て。かりけ猶まて
粟飯の御供なとそ今まつりてそれ近しての

ことゆりとそつかくよさ國くれ事ものと
くたくしきれくかつをと山御代は大津
ていくきくなりくなり者れ船をとうかうう
郡乃あるし政道をしくて民乃ものの
樂をもかくく明るもとくきれをさ
うをとハかをあくをかみかをうをたた
でいよくをやうれ御代しまれあのを
乃海あをくをくむ河を毛出乃さうえ
うをれ事えををしきふをうう

九州石乃記

寛永十五三月乃初博法殿下九州大友鳴澤
をとうをの絆楯とをめ彩をさをあり御
進發行事あり是与一郎同玄番允參陣乃
上家をのうれ八通をしを月あるし徒奉乃事は
命しをうをしをとをうをうを御陣乃祝をいるの
はれを面しをををををしをを乃ナ
九日日寅をを進於郡をくを四をして歩一百四を
をあくを其日八文津ををうをを歩二百松井乃城
松食ををくをを明をハを三さ旗をのをを毒
出くを洗日時乃をうをしを松井乃孫門と云をく
行留しを孟ををしくを出しを命廻をくを甚和い

らくもりと云ふ事なり白いとよく晴て風も遠きはいとよく出立てよく見ゆる

かゝる波の立ちのぼりたるは

こゝろ

軍書に欲必則莫令下向軍書とあるは

かりしかとれつるやうにて濃と云所より辰

の刻ばかりに出船して其日は暮方に但馬国

情のさうい若くと云所に泊る

嫁菜いとゝ多せてよろつらつきの桃

しかりて

重陽の日ひとあまたい里の若菜

若くとしてしかりの若菜

北六日伯耆国こうり屋より船を出す出雲

国仁保の関より九里あり船にて渡れば

ひとかりふすうきいて船を

とゝまる

船よりうみをみたるかなみの

さきもやゝくれ行て

かやうの日すこしくまりたるかて

云不注人の家

あるはしもいまし乳とのひものみの

のあるやうのもとゝ

たまうあるべきなれども、世の人、私に成敗をくはへ
ようと私人の作をもて、ことごとくいたづらにもなる
べきなり。私をもて法をまげ、ことごとくまつり行はば、
ようやくして、神祭官人の職をうしなはんか。
ゆゑに、作法の道、乃至、墨縄のごとくにして、
社司
神人、ことごとくふるまひをもて、社をもて人をもとどめうるなり。
況んや大社なり、神祇官いさかいをもて
是をもとどめうるなり。なほ、なほ、
ものもいはざるべきなり。
つまびらかにめくらまるべし。

千早振神の御心やうたがはん
わらわ初つる國のみつから
たつる作法と知るべし。秋廉しく云ふ、湖水ふ
私よ、家々、年田まで、けりよ、生涯うるべ
のりとうて
祭まつりうらやのうつるる
人ゝ、ゆゑ義のこひなるうて
あらんかて、善うるかりふきつるう私ふ
知るべ、家前とりめ来社当うるかるる
めうりて、ふ、当社、社、作司、千家、小路、信
も國道ゝうんいひ、ひ、家、ふ、其、べ、人物、

て其後藤宿とうりいて、推葉いとうかう
とう仮名をひらくやうとなる居とうかう
引代書西と云者、とうの東つまく対面しけり。
古敵うり人りてわるく流れ有く同々なるて。
一番ぢ面文まりしいとうとく仮し
くうふ西国遠よりあるつる者相なて。
文まくう遠うまけう行ふ笛敵う仮者たき
とみく、書文まて就舞まうり、思うけぬ
事なりき
たれう知るまう行りまりつ者たけつまて。
いとき事りまけ自もとけよくうといへて。

四つとくとくとくとくとあるかとの業と
二回　大乃神の神とあるかとん
かとうかうかとあるかとん
遠于素盞嗚尊利二出雲国一初有二三十一字詠
とあまとてやうく字うととあて千う神と。
思ふとうとうとうとつうけふるじ、は短冊と
千年の音へつうりまうよ面なとい一方へい
いとくわうとうひけふ俳るをい同言と
書てやりけう文面社な教より發句面
なとい
外花や神ういとと北ゆとうう

かゝるに書中ありけるに。子家方より今此発句は。
小諸にて連歌ありし。其方よりハ百韻興行
ありしとく。祇に発句所望して。発句所望
なりしを。うつしきにかゝりてよろしく
やせしを。所のゆかしや。わりなく申遣ける
折ふし人のやと座ゆかしとて思ひめくらし候に。折
節おりくまんの名所けまえ
おりしもきけ浅間の折柄やうしみ流れ
北方ゟ浅間の高くしく云所よと申りて所なれば
仁向し云津まて行に。浅間のうへあつきし云
古事ゟもたつれ。白波かゝれ。秋山のいそらうえ

えらくなからんとうちかへりとく
宗長やこのうききせと笑ふ祇も人のみち
浅間のうそはれあるき打ち詠
それより座そ浅山へ立てゆくに。座ま
かきし云城。甚ふの上ふ見下とみゆく
城の名もかけりけるやまみちも
かゝる志る〇とやまかゝりて
やとりける慈雨発句所望。座敷の楓の
まづ紅葉くく

深山木の中より夜をやゝわか出て

還りの津まて出て。実に漂泊よそしかけれ。

久年連歌り一巻をもてまいらせ
たるよりはじめ小文月ゐる歌句をもて歌
い百韻をつれ侍るまゝ
法の為りとて始まけうの歌をも
自和歌すゝ行とも一句連りをもて
そ發句面をもれと面白よ
うき草の移りひうをもりやあり
古演田と知くりよる角と云ふと云
あよりん角りて云ん角たりの松の木ろり
うこの月はんとそのあるとこと人丸の詠をもて
男ひ知く

うつり行をとゝもあをとゝらもせぬ
名ゐをたりの松のこの葉
とゝうして也門出よりうの葉
してりよりの為とゝ云ふ
世常ゝ事と男ひ知く
みるんのいとりとゝたのもの
せいりゝ也面の浦のとゝ
行るゝ國潘小知とゝ云湊ゝ唐紅の色て
ゝとゝ紅人のゝらはのゝけをとゝ
ぬせんとゝ遠ふ為とゝ也ゝとゝ
我をまとゝうつてひとてあとめぬ

まかりし船のちかよりし湊よりし
あとのうら浪のたゝくはえけるは
小法三尾とかいふ人やありけらん
うけ書さうしあとに見えける浪
十日瀬戸崎と云所を出船して風あらくて
高浪まては船ともまかりてたゝよひなかにも負あり
さはちんはたちひころたゝよひて文字とも
かゝる神なまといふうちはこゝの人なときよしと
云てしのゝ市にて舟の入りし九町ゆきよりは色す。
されとこそ無置をも行はるゝなとしてさぶらひ
して居よりける墓所を過行けるに木の

めくらして草木とも吹ちらしてくさの
おりてはみなとをとくりてやすらふ人見えける
いまはねらも旅人舟のりて舟は浪よ流さるゝなと
見え命ひとつをまかひとらむしてそれ
数は猶くのかさけも時の音おもかな候
西風吹きて浪の音さうしおすこをひく
見ゆるは船の出入きやくもありて船人とひ
あてしはこれらぬゝく関の渡りをせりこよし
いひ合くるまてる里出て十日せとさきと
出て大宰大弐大内義隆まんなてそ怕木と
はしるよ立ちよく一見しそまよい深山と

まけうえて、国家祈願し、ことごとくぬ信
抱の和尚出ぬ。経典佛法の初信を
まことにうしなうの人、知ぬ行て
ひとりなき夢てありのとんかもも
法のひしりてて、
心法を教通貴、十方一切人を思ひ
つきこうくや
豊浦宮と申るとく
水をもて池のうちにかくすことを
とりて、その池のほとみまて
ひとりして云ことをしてそ、ひとり行んと。

うの屋とりよりあなとて、ひとりあるよ。
国のそとくいたきをいのをとり行て
そ、いまてのうちはれまん初かを
るたしひとりや人のみとうん
国代海よりもとく、仏法をもて伝ふ長うる
つる寺をそのの人、四事をうん云ふ信に
業用して安宅天宮市新、平家一門の
像代見伝宮の、仏信者今の経典をうん
もてよ、新うの人のもものうりよ
もしかくうなりとものあるを
すうの海代後のおこうふ

豊前国門司乃関にて

たゆみなくつくやらん一つくも
こゝや誰ならむしの関守

兵粮船おさへひてきを見てくたすれ
と西国なれは
其の国にはわたとはてうるか
わけてもわすむくるのみとゆ
豊前の御浦名なとて発句下の句そへり
是国乃山くちまきし早苗かな

関門すうて来同関と出しく行宰の西名打
まや波風のめつきおもりし小倉小と南のさそゆら

我とよしあとをひしして筑前箱崎へ出し
て行に松人のかたはらん今なお所しいふ苔径
と求め松よのむかくきてうつ付ろりく成く元
杯して今よわとして云日秋乃よまき時に龍双る
と見ゆるよしとうては勅撰名寄のまへ今まし
云字と書くうして労てけうるり寄そくまへくて
かてありそをへり僧の宇まつ次ありて万葉
に我かりてを次去の子す人称とも歌讃くうる
本なしと思ひ出く

箱崎の松のはと行あり
かまいとまんやうさして乃美

やうに云たてまつりてよゝ沼あり
らくがうしてくに成りてくに成りて志賀の浦より出て今国
山乃文殊の坊より成りて南北大明神の由来
申伝るなり。春日藤源南北朝の頃いらひ
の神あらはれ給ふ縁起なりとて出て
見るに成れば波あり堀平の内れれの
つゝみ成ると路より所くに成れ中に成はまき南
北北御殿のよう北信乃うち生まれる文
書雅乃神御ようやうにやうにて一名ゑ
つゝみ成ると云ふ。ゑかうけ乃かつ
三里つゝも海乃中とりけて路より所きわり、

ちうちうそうちうちうき不ゐ十町ちうひろさい
十日ゆ間ちうもまて人えうち文様ちうも
ゆりませい橋之乃事中男ちうまて里こ
當社ゐ安墨ゆ成長九と云て神功皇后天皇
遠治乃時、彩宮より出く兵船の揖とう
して海上乃まうへせ神ちうもくうち
御めて
見うち山さうてやうふまうの海
神社ちくみの角てるれも
乃ゆ龍乃宮これあとあく
波とうけりうち北中通

此首をとゝく奉納して、廿五日箱崎にまうづ。此
わたりは、箱崎よりつゞきて松原ひろく
つゞきて、八幡宮は小高きにむかひて立給へり。
戒定恵の三字の箱をうづみしるしとて、しるしの松
かたはらにしるしの松とて古木ありしかば、そのそ
そのうへにて松を見てとをくめる箱崎の
松しるしの代のあらしなりけり
日たつ〈ぬけまに〉、松も見ず帰りけるに家を
神の箱崎の墨人のとし〈けまへ〉は
はるか〈に〉みちふめつゝ、さんたひにこゝろも
神の箱崎はなをのまつりけり

日も暮ぬれば、さ船よせて泊りしかば、
ひとゝきのよは神のみやにと
太宰府は天神の御すがたをうつし奉りし
あまたのおかまへられ、枝の松は七とせいつり
さまさまに栄えましてめでたかりける。
鶯の宿の横松枝の紅梅をさらにみぬ、寺
あたりよりのさかりしるは青山をひかえて、西
方七町ほどもはなれて見えて、観音寺
まで宮に西都とも云、寛き所なり。戒壇もた
本は絶てむかしけしき草のえの生出くさ
となりて

うひをねとゝひて花極う
とふそいくのて来よくん
をもとの深川と墨人よりて名よ行
ゆうよ男ひしよいうくうくう小ほのうくき
うをもなわうくうくうて
をうはむうくうをを深川や
みくなくてみくうくうも
男ひ川くくく
くくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のりてうへ　とて　義白と書はてゝ　へ
頼　ゆ　ゆ　ゆ

[illegible]

六月十日わたりの事雅の浦にて

[illegible]

事雅のわたりにて

[illegible]

[illegible]

いかにしてかはらめくもの

[illegible]

[illegible]

対馬の守憲宗家別れの詩一首

て歌数句有り[illegible]出船のよし

仮名にて高[illegible]

[illegible]

[illegible]

卒因和歌韻

始識逢君情所鍾　向来相約対閑窓

帝都門外箕言遠　千里同風一樹松

[illegible]

[illegible]

数句

[illegible]

六月廿四日一折法行寺へ参詣ス

炎天ヲ冒テ

涼ノ吉ヲ秋風ニ西ノ海

ゆまさの松を行かと思ふよ

ゆかれぬ松のうきを世ゆゑ

と千ふ易ちつゝひと潮けれ逆ゆ

西日さしいるゆふ形ゆるゆひさ

うつゝ世ゆ世ゆをとも

世ゆ国自家花親ゆ出さゝく草

花をいさまれゆ御ゆ一ゆ煙

それて数白ゆ色さゆわれて

十日ゝ友草ゝ

すゝき穂ゆさゝゆ月松

ゝゝゝ蔦の屋ゆひゆと行いさく由ゆ

七月ゆ国自家武家ゆ海浦ゆ行ゆて

糸津をゝ入れゝ小高ゆ松ゆ南北

海と見ゆゝゝと宮ゆ行ゝ秋世見

にゝゝゝゝゝ松ゆて六日ゝ逆高

行ゝて四日行宮行ゝ

ゝゝゝゝゝゝ

六日ゝゝゝ松ゆゝゝ

ゝゝ松の出ゝゝ関行

船まとをこぎいでて、ちかう心ぶかくなりぬ。
と船いたりのわたりの
の夜なり。
七夕の別のそらもうらめしう、
寝ぬるかとひのこころもち
日ぬ寺社詣でしつ。同じ所に天神まで
立出でまゐりぬ。通ぬ国守の待遇一塗
真物とこそ
もちうなり。其日追儺して九日は
十月は国府天神へまゐりぬ。
十日は

浦ちかき所にて船のまりぬと行て舟を
居うつす。高社の仏像堂房数多ありて
一面なりもはるかにとりまはして
入ぬひの時分より祈りて、夜中ばかり
まんまんけ。其時船出をうつ。天神
の市ひとそ。前津(信イ)よりこぎ出ける
安わけまゐりて風の吹むけ
回ぬ。澪ふかくまりの浦とぬる綱の
ゆるくけりてあまい
高砂ぬ
[illegible]
[illegible]

十一日晴田植とて出て来て其日いよいよ関と云われ
和とうけて和泉の国堺の浦とて堺よりひろを
て和泉とて堺より四里ほど出て来て
やうやく

わたなかなたなりとも
えくりむ
そもそもの厳島ちかくなりて社ばかりとかるに
海の西二町ばかりにて
さうし廊も相はいみな堺にてあり
和泉みなと
それより下津とかねれば

波のうちにたちてあれば
はしらとて高社あり稲荷左近の宮とて
うちやうとうくまそて月小成なれい三和てあり
まもなく恒平恒満同じ宮とうして
河三三町ばかりも堂をたてあり恒いかて
大海北宗れて宗紙屋作るとかりかる
又大行院長次数有りて十三日一会あり
つと高社よりみな池と云われい

新うけて月やうやみの池とも
十四日より棚寺連歌長りとうあり
もも五日にわたりまりやはさるなり

やまとへきこえて辞退延引せられけるに為白川
うたとしてあるをかりにとらせられ
秋やまとへこしまちけるこゝろかはよわりはて
きゝしのをいはきりをかの月をうかべて
夏いてゝこゝろ長かの捕三帝出家をなして
孔雀明王の眼指給ひて彼国なり
とうとけれ不思議と云ひ出家
もの白かりしうまへとうまけるに又時分の二条
こゝろうけるとこゝにいたりやうかをとる
しかりてこゝ一首作りよみ

てはうもりけ
たてうこゝろやまうれこゝ
おもしろかの所のこゝ帝なり
十六日文治年延年と云ものと
いへとん和して書つるに和歌あり
はうみまゆりかてそれうの後の津の儀
中庭にしてこゝ日行さ鞠まてこゝ
作に作四法師のこゝ宿なもこゝ
今もこゝ深きこゝわをいこゝて筆
小作日こゝ書こゝ和と出こゝ
云へ義白不なり

右衛門督の月やとはるゝとて
をまとりの後の秋の月
かりに筆問はるゝ
りかうけをとも歌
ゆかりのやかれ
十九日後の秋
きまり書りし宮
うけてもやそ
せくらの秋の月
秋は彼てなし

[illegible]
[illegible]
月の秋の月
秋はいとなし
月の
[illegible]
[illegible]
月をひとりとなみ
とくわりてはるか
まくりなり

[illegible]

[illegible]

十一日の夕方ともなりて雨ふり出でぬ。雨降とは

[illegible]

いとうの松よりひしてこさせんん

我家しるしに思ふまいらん

ひのもとの城と松はよんでおりけれども雨

門ちかくまで海の面のごとく松人り

ゐるように水と小高うゆきたまふ云

水とりいくむしゐあるきの面川

小さい海のようにして居れるうち

ちかくまでひきたまと書きて雨降

の海に松ばかりなく其外は何も

高砂北尾とうもの松うなし

ものもうるこの海のようにて

色より松ばかりのうつくしん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又須磨と云所とて[illegible]

海はるかなる[illegible]

いくせとも[illegible]

[illegible]

波[illegible]の海[illegible]

[illegible]

[illegible]

は物語りの如く、年来あつまりつもる、花奥のいとゆかしくてをくることゆゑ後法
うちまもりうへうちうち、四方にて作りとゝのへ
うを作りて作ふふくまつりものんさしも
しうりは作られば、三光院四方、そのうち
ちうしは志ゝへつゝ、長谷寺のかたち法隆
天満宮、ゆうもとゝ知らく作り、
うを作りて歳命より、年うの祝文懸軸形ふ
む、道遥院殿へ、強字せしと惟物ゝくれ付
作りし、帰京を祝ゝと故ゝく、来祝ゝ年とゝ

まゝとうんてうしゆ、品なるんてうの
殿ゝにひらめくゝ、そもそもをを作ら
後義忠、宗光院殿、大光寺、惟后
道場、其外宗長紹巴なゝ、惟后義俊、宗慶院惟后
ゝとゝしゝと祝ゝて、おゝ見肖像の作物とあ
ゝ、作りの作ゝ作ひて、ゝと用作せし、作物
ゝ多ゝ、国類作ゝ作則暮ゝとゝ、よて
国類ゝとゝて、作物知りゝ、
やゝゝゝやゝゝゝ、ゝんゝんゝ、
仲春十六日、ゝ、元亨文禄ゝ年

義想記

同

慶長乃天しの御年仲乃天たゝ板はゝ亭よりつ
ゝ地ゝ雨ゝ洪音渡の霊験と感をゝ
津なりゝ言和歌ゝいとく

世と神と忘ゝうあいゝの神者乃
松乃みとりと住ゝし神

凡夫長なりゝ表象あり者黄帝長ゝ毒者
民乃ゝ様ゝ様ゝ乃後ゝ下たく治れゝ
津波治ゝとゝ言ゝ又殿高京神民
ゝ天ゝ国家感なりゝ津ゝ中ゝ天ゝ験
なりゝ中よつゝ松ゝ十八公乃名神

ゝ天ゝ神又丁国ゝ蒙ゝ感せ一和歌ゝあ
ゝ和神住者乃西神ゝ海の遠ゝ
ゝりあゝゝれ知ゝ
活ゝ者ゝ乃家知
あゝと遠ゝ長ゝ
ゝれゝ者代乃御ゝ
時ゝ西神ゝ感
ゝ神ゝ山秋津洲西乃海
ゝ海ゝ
山時ゝ
住者乃松ゝ小松乃

[illegible]代とうそ〳〵しく勅命ねさうえん・真源
[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]齢[illegible]れ
[illegible]今この年とまで[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]八幡世とまでの[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan